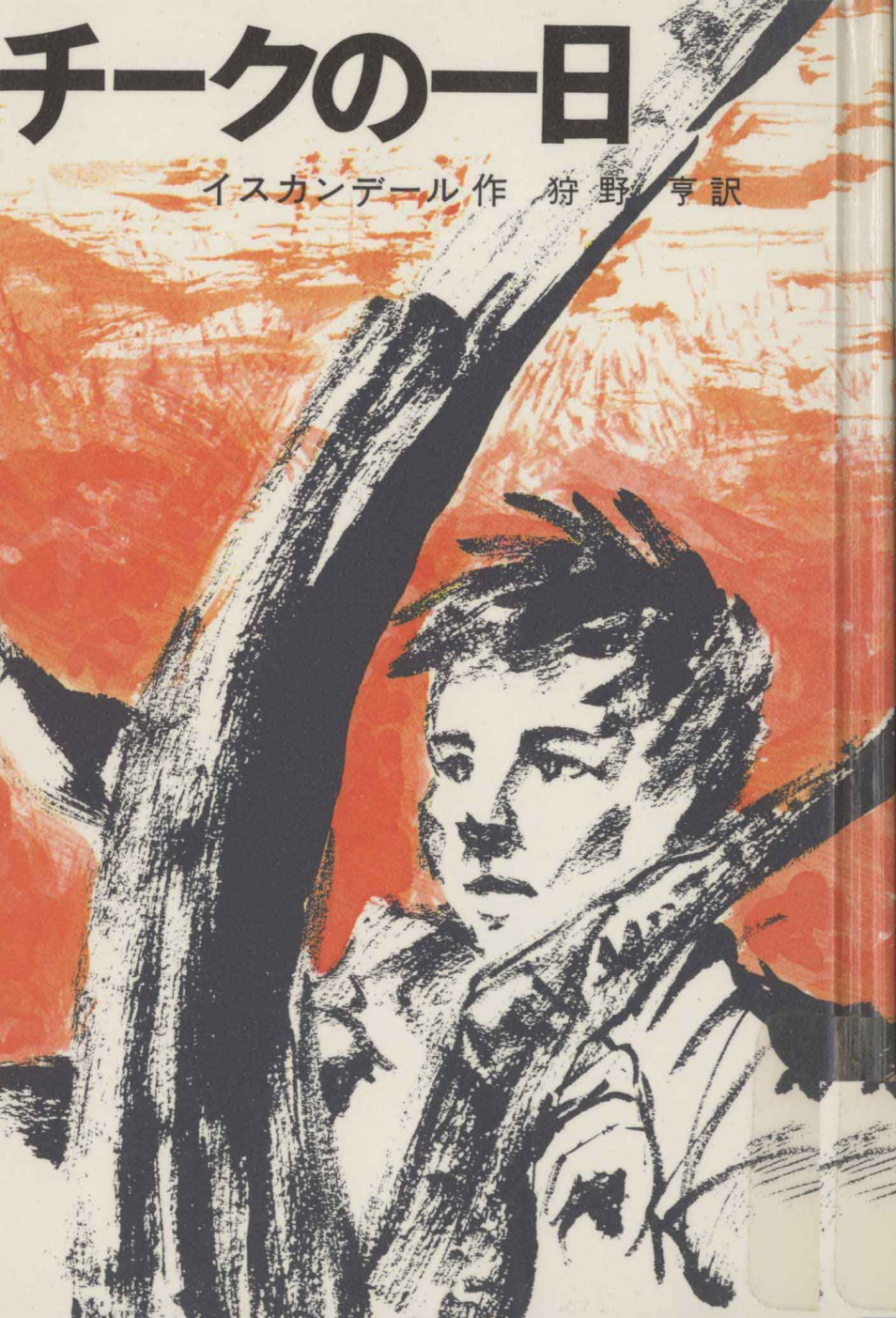


チークの一日

イスカンデル 作 狩野 亨 訳



チークの一日

イスカンデール 作 ^{かのうとうる} 狩野 亨 訳



ДЕНЬ ЧИКА
by ФАЗИЛЬ ИСКАНДЕР, 1971.

チークの一日

定価 980 円

1977年9月1日 第1刷

訳者 狩野 亨
装画 政森古徑
発行人 坂本起一

印刷 (株)東京美術印刷社
製本 富士製本株式会社

発行所 合資会社 富山房
東京都千代田区神田神保町1の3 郵便番号101
電話東京(03) 291-2171~7 振替東京5・54529

© Toru Kano, Komichi Masamori
Printed in Japan, 1977.
(落丁・乱丁本は おとりかえいたします)

8097-897031-7313



チ
ー
ク
の
一
日

チークは、中庭の太い葡萄ぶどうのつるの上に腰こしかけていた。つるはうねるように桑くわの木にまきつき、上へ上へとはいあがっている。犬のベルカは両方の前足をチークのひざにおき、鼻面はなづらをひざの間にうずめるようにしていた。チークは片手かたてで犬の背中せなかをなでてやりながら、ときどきかわいた草の茎くきやあざみの刺し、ときには、だにまでも取りのぞいてやっていた。

かわいた草の茎くきは投げすて、あざみの刺しは、ぼんとはじき飛ばす。だにを発見した場合には、用心ぶかく地面におしつけ、サンダルで力いっぱいふみつぶしてしまうのである。

頭から背のほうになでてやると、気持がいいのだろう、鼻面をてのひらにこすりつけてくる。だにや刺がなかなか取れないときは、くんくんつらそうに泣いてみせるのだが、逃げ出そうとはしなかった。犬は、ただチークにもっとやさしく取ってもらいたいだけなのである。これが自分のためになることぐらいは、わかつているのだが、やはり犬だって生きもの、痛いときは痛いのだ。

チークが、だにをそっと地面におくのを、ベルカは、ものめずらしそうにながめていた。あんなにかゆくてたまらなかったのは、おやおや、こんなちっちゃなやつのためだったのかと、感心しているのだ。そしてチークがだにをサンダルでふみつぶすたびに、ベルカも首をふり、鼻を鳴らして、おまえみたいな寄生虫は、それが当然といった態度をするのだった。

チークから二、三步はなれたところでは、かるやかな音をたてて、ニーカがनाव飛びをやっていた。ニーカの長い足は同じリズムではね、白いスリッパはちらちらと光り、黄色のワンピースが、大きく波打っていた。ときどきワンピースが、

ぱっとちつぽけなパラシュートのようにふくらんだ。

チークはふきげんそうに、まるで自分が中国の皇帝こうていの卵たまごにでもなったようなぞんざいな態度たいどで、ニーカのこの退屈たいくつな動作を見守っていた。ベルカも横目で飛びはねる女の子をこわごわ見つめていた。なわがばちつと地面をたたきたびに、ベルカは、目をしばたいた。犬にとって、この音は気分のいいものではないのだ。どうやら、ベルカもびくついたりして、はずかしく思っているようだが、ぱちつと音がするたびに、思わず目をとじてしまう。あのいやらしいなわが、いきなりなぐりかかってこないともかぎらないじゃないですか、とチークにいたげなようすであった。

チークにとつても、このなわ飛びはおもしろくなかった。しかしベルカのとほ理由がまるつきりちがつていた。きょうおなじ中庭に面して住んでいる男の子や女の子たちといっしょに、松まつやにのマスチックを採とりに出かけようとチークはきめていた。ところがニーカは出発じゅんぴの準備をするでもない。参加を取り消されはし

ないかとおそれて、チークのそばにじつとひかえているでもない。ニーカときたら、そう考える気配すらまったく示さないのだ。

松やに採り？ いいわね、でも、みんなが集まるまで、わたしなわ飛びやってくるの、とニーカの態度全体が、いいかげであつた。

チークはこういうのが世の中でいちばんきらいだった。これは（チークはこれをなんと呼んだらいいかわからなかった）一部の男の子と女の子全員についていえることだった。すくなくとも、任務にさいごまで忠実な女の子を、チークはまだかつて一度も見たことがないのだ。いつも女の子たちは、何かくだらないことで任務をだいなしにしてしまうのである。

たとえば、いっしよに原っぱにとんぼとりに行くとなると、かならずだれかが遅かれ早かれ、ちようちよを追いかけはじめたり、花を摘みはじめる。かと思うとてんとう虫をつかまえて一時間近くも、てんとう虫よ、お空に飛びたて、とはやしたてるしまつた。すべてがこの調子なのだ。脳みそがすこしばかり足りない

のではなからうか、と思われるふしがあるのだが、女の子たちがはじめからこんなふうにできているというのなら、これはどうしようもないことだ。

ニーカもそのとおりだ。マスチック採りの大遠征に出かけるというのに、そんなことはどうでもいいような顔をして、なわ飛びをやっている。

それはそうと、マスチックを知らない人のために。これは松やにを煮つめて、きれいな布ぬのでこして作るガムなのだ。布ぬのは、ハンカチがいちばんいいのだが、まだ鼻をかんだことのないのがいいにきまっている。

マスチックをかみ、ぷーっと風船をふくらますときは最高だ。それに今はマスチックがとてもはやっているのだ。マスチックをかじりながら仲間なかまたちのところに出ていくのはかつよかったし、好感こうかんをもたれるのだ。

その反対に、何週間も口をからっぽにして仲間なかまといっしょにいたり、かみたいばかりに人にねだったり、ガム風船を作っている者たちを見つめながら、自分も思わずまねをして唇くちびるをつき出したり、舌したを出したりしようものなら、それこそ

感じわるく思われてしまうのだ。

そうなると、その子は、マスチック採りにいけない者、松やにを集めることも、上手に煮つめることもできない者と、みんなから思われてしまう。もつとまづいことには、マスチック採りにいくのを親からゆるしてもらえない、腰抜けで、こつそり抜け出す勇氣もない、かわいそうなやつめ、となってしまうのである。だからマスチックを長い間かんでいない者は、たまらなくつらい。みんなの笑いものになるのだ。

チークは、中庭では自分が頭だとみずからみとめていた。もちろんチークはそのことを自分から口にしたことはなかったし、口にするほどばかりではなかった。しかし、自分が頭であることはあたりまえだと思っていた。というのも、じっさいにそのとおりだったし、友だちの中でいちばん年上の、成金仕立屋の息子オーニックよりチークのほうが三カ月上だったからでもある。

中庭にはほかに男の子たちがいたが、ずつとおとなだった。かれらはチーク

より五つも六つも上で、計算外だったし、かれらはかれらなりにやっていた。

オーニツクのお母さんは、チークはオーニツクより三カ月年上だが、ずるさにおいては三年も上だと繰り返して^{かえ}いていた。まるでおうむのように何千回となくあきずに繰り返すのだ。

オーニツクの母親のことばの中には、それなりの真実さがあるとチークはみとめていたが、その真実をオーニツクの母親はわざとゆがめていると思った。チークだったら、自分とオーニツクのちがいを、もつとふさわしいことばで表現^{ひょうげん}していただろうに。しかし、チークはだまっていた。というのは、それほど利口^{りこう}でもないこの母親に説明^{せつめい}したところで、ろくなことはないと考えていたからである。しかし、はつきりいつて、年上の者から、自分のずるさをいわれるのは氣持のいいものではない。人をだますようなことはしない、というのではない。それどころか、やむをえないときは、チークは大いに人をだましてきた。近所のおとなたちは、チークをずるがしこいという。が、それは、チークがおとなたちのずるさ

を、かなり前から見抜くようになっていたため、おとなたちがつけないがかりであつた。

以前から気がついていたことだが、中庭でおとなたちが、子どもや、あるいはおとな同士で話をするとき、いつていることと考へてることがまったく裏腹なことがしょっちゅうあるのだ。いつてることとちがうこと考へてゐるな、と感づいても、チークは一度も、その考へをストップさせるようなじやまだてはしたことがなかつた。しかしどういふわけか、おとなたちは感づかれると、すっかりふきげんになつてしまふのだつた。

こんなことでおとなが自分に腹を立てるのには、チークもただただおどろくばかりだつた。おとなたちが裏で何を考へてゐるのかあまりにもはつきりしてゐて、知りたくない、見破るまい、としてもわかつてしまふことがどうかするとよくあるのだ。

チークがまだとても幼かつたころ、おとな同士の会話で、話してゐることと考

えていることがちがうのは、それなりの遊び方なのだろうと思っていた。こんなとき、相手もぜんぜんちがうことを考えているのだから、だれもごまかされるようなことはない、ということにチークは気がついたのだった。ただ理解できないのは、この遊びが終わっても、笑いもしなければ、おもしろかったねともいわないことだった。自分の家でも、お客さんが来たとき、みんながいつせいにこのゲームを開始するのに、チークはときどき気がついていた。全員がおなじことをいい、そのくせ、全員がほかのことを、それもじつに種々さまざまなことを、そのかたわらで考えているのだ。だから、いったいだれが何を考えているのか、めぐるしくて、追跡不可能になってしまい、いいかげんにくたびれてしまうこともときどきあった。

もつとも、そうでないこともある。おとなたちがこのゲームを忘れ、ひとりがそのうち、裏のことなど何も考えずに、興味ぶかい話をしはじめることだってあった。こういうときチークは、ほればれとその人間の話に聞き入るのだった。

話が脱線してとぎれることもあるが、べつにチークは、そんなことで気をわるくするようなことはなかった。たばこを吸ったり、さかずきを口にもっていたり、裏の意味をもたない、というよりはまったく意味のない乾杯の音頭をとっているときでさえも、チークはじつとがまんづよく待っているのだった。

チークは自分の友だちを、おとなは裏腹なことをいいかねないと感じている者と、それを感じていない者の二つに分類していた。感じていないほうの連中は、たいていとんまで幸福な子どもたちであった。無知は、このような子どもたちをより幸福なのんき者にしていたし、それと反対に、知識は傷つきやすい人間を作りあげている、ということをしてチークは感じていた。チークは、こういうことをすでに知っていた。というより、知ってはいたが、チーク自身、自分が知っていることを、まだそれほど意識していなかった。

たとえば、オーニツクなどは、おとなの話に夢中になって聞き入り、ことばの裏にいったい何がかくされているかなど、思ってもみない子どもたちの部類には

いる。この單純たんじゆんさがオーニツクのとりえでもあったが、チークはそれを、永遠えい、えんに失うしなつてしまっていた。しかし、それにもかかわらず、チークはオーニツクがすきであつたし、ときにはこの少年の長所である單純たんじゆんさをうらやむことさえあつた。ときどき、チークはオーニツクに対し、意識いしきてき的に意地わるな態度たいどをとることがあつた。オーニツクがかなり氣樂きらくに世の中を生きていると見たからである。

そして今も、マスチックを採とりにいくために、チークはオーニツクにいちばんやっかいな仕事、つまり、家からきれいなハンカチを持ち出してくることをいつけたのだった。というのは、とかした松まつやにをハンカチでこすと、そのハンカチは使いものにならなくなってしまい、洗あらいようがないのですてるほかないのだ。どうということもないだろう、とチークは思った。成金仕立屋なりきんしたてやなんだから、たかが一枚まいのハンカチで損害そんがいを受けるようなこともあるまい。

オーニツクとチーク、女の子のソーニャとニーカがこの遠征えんせいにいくことになっていた。そしてもうひとりの参加者は、リョーシツクであつた。これはチークに

とって、女の子よりはるかに重荷であった。

リョーシツクは、足を引きずる上にどもりであった。うわさでは、生まれたとき、もうそういう病氣をもっていたのだそうだ。チークは、リョーシツクの足と口を同時に不自由にしてしまったこのおかしな病氣について、つい考えこむことがあった。足がわるいためにどもののか、どもるために足をひきずるのか、いたいどつちなんだろう、とチークは考えた。その両方であると思なしても、おかしくなかった。からだは不自由であったが、リョーシツクは氣立てのよい少年であった。チークは、たびたびリョーシツクをいじめっ子たちから守ってやっていた。

リョーシツクは足もとがおぼつかなかった。平らなところでも、べつにどうといったわけもなくころぶことがあった。なんとなく足がこんがらがってしまうのだ。あるときリョーシツクが表を歩いていると、近所の子どもがじょうだんにこう叫んだことがあった。